■蒲生君平　尊王思想家。時代に警鐘を鳴らし，「山陵志」で幕末の尊皇論を先駆。高山彦九郎・林子平と並ぶ寛政三奇人。
がもうくんぺい
久留米藩工事1768＝　　下野国宇都宮で油商と農業を営んでいた福田又右衛門正栄の第4子として生まれる。

田沼意次老中1772＝ 4歳：
大原騒動・・1773＝ 5歳：宇都宮延命院の住職某に就き読書・習字を学び，

・・・・・・1777＝ 9歳：
_やや長じて「太平記」を読み，楠木正成・新田義貞の勤王事蹟に感動し，また皇室の衰微をなげき古典研究の志をおこす。

・・・・・・1781＝13歳：下野国鹿沼の儒学者鈴木石橋について，国史・古典を学び，
ついで黒羽藩士鈴木為蝶軒からも学ぶところがあった。

また，**_水戸の藤田幽谷と交わり，たびたび水戸へ行き水戸学の感化を受ける。**

田沼意次失脚1786＝18歳：**_この頃，5代の祖正嗣が蒲生氏郷の庶族より出ていることを知り，名門の名を辱しめないことを誓い自ら蒲生氏を名乗り，別に家を興した。**

異学の禁・・1790＝22歳：**_高山彦九郎の後を追って陸奥国に赴いたが会えず，帰路仙台に林子平を訪ねる。**
_ロシア南下にともなって北方問題がやかましくなってくると，
ﾗｸｽﾏﾝ来日・ 1792＝24歳：**＊「今書」2巻を著わして時弊を論じ，**
松平定信引退1793＝25歳：

写楽・・・・1795＝27歳：再び陸奥を巡歴してロシアの動静と北辺防備の計画を練った後，
ﾌﾞﾛｰﾄﾝ来航・1796＝28歳：**＊歴代天皇の陵墓が荒廃していることをなげき，「山陵志」論述のため京都に赴く。**
古事記伝・・1798＝30歳：水戸へ行き有志と交わり，さらに仙台へも赴いた。**_水戸藩の「大日本史」が紀伝だけで志類がないことを惜しみ独力で神祇・山陵・姓族・職官・礼義・農・刑・兵などの9志を編纂することを計画し，その最初として「山陵志」の完成につとめ，**
伊能測量始・1800＝32歳：再び上京し歌人小沢蘆庵宅に止宿して，京畿の陵墓を調査し，帰途松坂に本居宣長を訪問，さらに北陸経由で佐渡に渡って順徳天皇陵にも参拝。
宣長没・・・1801＝33歳：**_「山陵志」2巻を脱稿。その序文を本居宣長に送って批評を求めた。同年たまたま宇都宮藩で興学の議があり，その結果君平は江戸昌平黌に学ぶこととなり，林述斎の門に入って経学を修め，**
一九膝栗毛始1802＝34歳：文教振興につき述斎に建議した。
ﾚｻﾞﾉﾌ来航・ 1804＝36歳：江戸駒込吉祥寺の近辺，のちには本石町に住んで**_「職官志」を執筆編纂，**
またロシアの千島.樺太侵掠事件に憤って，
ﾛｼｱ船狼藉・ 1807＝39歳：**_「不血緯」を著わして，国防と尊王を論じ，これを若年寄水野忠成に呈する。**
ﾌｪｰﾄﾝ号事件 1808＝40歳：**＊知己友人の援助により，ようやく「山陵志」の出版が実現を見，**

ｺﾞﾛﾌﾞﾆﾝ拿捕 1811＝43歳：**_「職官志」第1巻も出版されたが，**

浮世床・・・1813＝45歳：**_病没した。**
墓誌は藤田幽谷が書いた。水戸学の影響のもとに大義名分を重んじ，尊王の志に厚く，「山陵志」は幕末尊王論の先駆をなすものとして有名。高山彦九郎・林子平と並んで寛政三奇人の１人に数えられる。

「この人どんな人」，「没年日本史人物事典」，平凡社百科事典，